

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520472

研究課題名(和文)室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究

研究課題名(英文)A Study of Kirokugo and Kiroku-goho in the Archaic Records and Archives of the middle Muromachi Period.

研究代表者

堀畑 正臣 (HORIHATA, Masaomi)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：30199559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：(1)室町中期の古記録、広橋兼宣『兼宣公記』(記録1387～1428)、山科教言『教言卿記』(記録1405～11)、中山定親『薩戒記』(記録1418～43)、中原康富『康富記』(1417～55)を取り上げ、記録語、異名と唐名、漢語表現と漢文語法、記録語法、病の語彙、その他(特徴的な点)を調査し、その文献のもつ記録語と記録語法、語彙的特徴等を記述した。(2)室町中期の『看聞日記』にて、「生涯」とその熟語(及生涯、懸生涯、失生涯等)の意味を調査し、『大乘院寺社雑事記』にて、「生涯」に「命を失う」の意味が出現する時期を明らかにした。(3)中世の阿蘇文書における記録語を調査し、記述した。

研究成果の概要(英文)：(1) I examined the archaic records of the middle Muromachi period, including "Kanenubu Koki" (1387-1428), "Noritoki Kyoki" (1405-11), "Sakkaiki" (1418-43), and "Yasutomiki" (1417-55). I investigated 1). the recording words, "kirokugo," 2). "imyō" and "karana," 3). Chinese expressions and the grammar usage of Chinese classical literature, 4). the use of the recording words, "kirokugoho," 5). vocabulary words for diseases, and 6). other distinctive features. I also described the recording words, the use of them, and distinguishing characteristics of vocabulary in the documents. (2) I examined the meanings of the words, "shogai," and its idiomatic phrases (e.g., "shogai ni oyobu," "shogai ni kakete," and "shogai wo ushinau") in "Kanmon Nikki" in the middle Muromachi period. I elucidated the period, when the meaning of "losing a life" emerged for the word, "shogai," in "Daijoinjishazojiki." (3) I examined and described the recording words, "kirokugo," in "Aso Monjo" of the Middle Ages.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：古記録・古文書 記録語 記録語法 室町中期 生涯 看聞日記 大乘寺院寺社雑事記 阿蘇文書

## 1. 研究開始当初の背景

古記録の国語学的研究はこれまで、平安後期が中心で、それに院政期・鎌倉期の研究が少々なされているという状況であった。

平成 19 年 2 月に拙著『古記録資料の国語学的研究』(清文堂出版)を刊行したが、その中でも軍記物語や抄物、キリシタン資料、そして狂言資料との関係で、今後の古記録研究としては室町時代の古記録研究が重要であることを述べた。そして、前回(平成 19~21 年)の科研(課題番号 19520399「室町前期の古記録に於ける記録語・記録語法の研究」)では、室町前期で自筆本を持つ、中原師守の『師守記』(記録期間 1339~74 年)、三条公忠の『後愚昧記』(記録期間 1361~83 年)と室町中期の伏見宮貞成親王の『看聞日記』(記録期間 1416~48 年)を取り上げ、室町前期の『師守記』、『後愚昧記』と室町中期の『看聞日記』への推移を調査した。前々回の鎌倉期の文献に比べると室町前期の古記録文献での記録語・記録語法は変化を来しているが、室町中期の『看聞日記』のような変化までには、未だしの感があった。しかし、調査の中で『後愚昧記』の永和四年(1378)十月の中原師香の書状に「乗物なとも自専候八ぬ式候て、存候なからにて候、窓下され候へく候、」という「くだされ」の補助動詞的用法と思われる例が一例見つかった。今までの報告からすれば、時代的に早い用例である。また、記録語の出現の仕方と意味用法が古記録と古文書では違うということも研究の途上で判明した。その点から消息や古文書にも調査の目配りをした研究の必要性を痛感している。更に、家の違いにより微妙に記載方式が違う。その観点からの調査も必要である。

そこで、今回の科研の計画では上記の観点を踏まえて、室町中期の『看聞日記』(記録期間 1416~48 年)の少し前の古記録類(自筆本、家の違い)を選び、それに同時期の古文書を加え、「室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究」と題し研究計画を立てた。

## 2. 研究の目的

室町中期の古記録・古文書資料に見られる記録語・記録語法の研究を行う。古記録の国語学的研究は、平安後期が中心で一部鎌倉期の文献による研究がなされている。室町期の古記録の研究は極めて少ない。室町期の古文書研究は仮名文書ではなされているが、漢字表記の古文書ではまだ少ない状況である。本研究では、記録語や記録語法等で大きな変化を示す室町中期の古記録とその同時期の古文書に見られる記録語や記録語法を調査・研究し、室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法を研究するものである。中世の古記録・古文書の文章や言葉は、所謂和漢混淆文の軍記物語(平家物語、太平記等)や、

抄物、キリシタン資料、狂言などに流れ込んでいる。本研究は、室町中期の古記録・古文書の語と語法の研究を通して、中世の文章語と口頭語へ記録語・記録語法がどのような影響を与えたかを考究するものである。

室町中期の古記録文献として、家の違い、自筆本をもつこと、活字本や影印本の入手しやすさ、記録期間の分布等を勘案して、広橋兼宣『兼宣公記』(記録期間 1387~1428 年)、山科教言『教言卿記』(記録期間 1405~11 年)、中山定親『薩戒記』(記録期間 1418~43 年)、中原康富『康富記』(記録期間 1417~55 年)及びこれと同年代の古文書を取り上げ、そこに見られる記録語や記録語法を調査し、1)個々の文献の文体的特徴、2)室町中期に共通する記録語や記録語法の特徴、3)室町中期から新たに出現する記録語の記述、4)鎌倉・室町前期と室町中期の比較による文体的変遷や記録語の意味変化、5)古記録と古文書での用例数や意味変化の違い等を調査・記述する。取り上げる文献と古文書は次の通りである。

- 1、広橋兼宣『兼宣公記』(記録 1387~1428) 自筆本・刊本有、史料纂集に 1 冊既刊
- 2、山科教言『教言卿記』(記録 1405~1411) 自筆本・刊本有、史料纂集に 3 冊既刊
- 3、中山定親『薩戒記』(記録 1418~43) 自筆本・刊本有、大日本古記録 4 冊既刊
- 4、中原康富『康富記』(記録 1417~55) 自筆本・刊本有、増補史料大成 4 冊既刊
- 5、古文書：東寺百合文書・東大寺文書・高野山文書・大徳寺文書等の 1387~1455 頃

## 3. 研究の方法

これまでの科研(平成 12~14 年度『院政・鎌倉期古記録に於ける記録語・記録語法の研究』、平成 16~18 年度『鎌倉時代の古記録に於ける記録語・記録語法の研究』、平成 19~21 年度『室町前期の古記録に於ける記録語・記録語法の研究』)の調査状況を踏まえ、「記録語(和化漢語と和製漢語)」、「異名と唐名」、「漢語表現と漢文語法」、「記録語法」、「唐代口語」、語彙(病の語彙等)、「その他」の観点で、室町中期の四文献を毎年一文献ずつ取り上げ、記述研究を行う。古文書については、論文等にまとめるときに古記録の様相と古文書の様相を共に記述する。東大史料編纂所等のデータベースが充実してきているので効果的に利用しつつ、記述研究を推進する。なお四文献は(時代順に『兼宣公記』(記録 1387~1428)、『教言卿記』(記録 1405~11)、『薩戒記』(記録 1418~43)、『康富記』(記録 1417~55)で、古文書は東寺百合・東大寺・高野山・大徳寺等の 1387~1455 頃の文書(四文献と同時代)を東京大学史料編纂所古文書 DB で調査する。

「記録語(和化漢語と和製漢語)」: 記録語の中には、元は中国の漢語であったものが日本に伝わり、長年使用される中で日本的に意味を変えたものがある。それを「和化漢語」

(遠藤好英氏の命名)として取り上げる。また、日本でできた和製漢語も室町期には多くなるのでそれを取り上げる。「和化漢語」としては、今までの科研の調査から、鎌倉期に意味変化が見られる(1「有若亡イヅヤカウ」2「對揚タイウ」3「牢籠ヲウ」4「和讒ザン」5「響應ヤウウ」6「左道ヤウ」)や、鎌倉期から室町期にかけて意味変化を起す(7「會尺イン」8「邂逅カウ」9「雅意ガイ」10「涯分ガイ」11「活計カキ」12「歡樂」13「計會ケイ」14「時宜(時儀)ジギ」15「生涯(生害)シヤガイ」16「參差ソツ」17「自愛ジアイ」18「題目ダイ」19「中央チウウ」20「籌策チウウ」21「比興ヒキウ」22「秘計ヒケイ」等を調査する。また新出和化漢語も調査する。この他、室町期に見られる「和製漢語」の(23「各出カクツ」24「勘落カク」25「不合期カウ」26「入根(魂)シユウ」27「同篇ドウハン」28「突鼻トヒ」)等の使用と意味変化を探る。

「異名と唐名」:『看聞日記』には、1「回禄カウ; 火災」2「鸞眼ガガウ; 錢」3「五色ゴシツ; 瓜」4「五明ゴメイ; 扇」5「首陽シユウ; 餓死すること」6「要脚ヨウヤク; 錢」等の異名が見える。鎌倉期の『吾妻鏡』には多くの「異名」が見え、室町前期の文献にも異名は多かった。室町中期の「異名」の使用状況を調査し比較する。「唐名」は、鎌倉期の『明月記』には、「羽林」「京兆」「戸部」「執柄」「宸儀」「太理」「都護」等の「唐名」の使用が見られたが、室町中期の古記録文献ではどのような状況であるかを明らかにする。

「漢語表現と漢文語法」:平安・院政・鎌倉期のそれぞれの古記録文献を見ていくと、本来「漢籍」で使用された「漢語表現」が見られる。これらは日記の記録者の漢文の学識によって様々な様相を見せるが、院政期の古記録あたりから増加傾向が見られる。『明月記』でも「原憲」「漁父之誨」「謳五噫」「会稽」「進退惟谷」等があった。この他にも「漢語表現」と一括りできそうな語群がある。これらの語は古記録の中では一種の漢語イデオムとして受け継がれていく。この「漢語表現」に着目して、室町中期の古記録ではどのようになっているのかを調査する。「漢文語法」については、「豈」「蓋」「況」やその他の所謂「漢文訓読特有語」が室町中期の古記録に於いて、どのように使用されるか、更には本来の漢文の語法とは違う使われ方で室町中期の古記録の中で使用されていないかに注目して調査する。

「記録語法」:「被下(クハ)」や「有御~(御~アリ)」など古記録・古文書から浸透してきた語法を調査する。新たな記録語法の発見にもこころがける。

語彙(病の語彙等):室町中期の文献の病気語彙を調査する。『看聞日記』には「瘧病」「脚氣」「虚勞」「減氣」「傷風」「所勞」「中風」「腹痛」「風氣」「病氣」などが見えた。鎌倉期の『明月記』には「飲水イスイ」「獲麟カリン」「寸白ハク」「石痲ヒリン」「雜熱ゾウチ」

等の語が見られた。室町中期の古記録文献でどのような語が出ているかを調査する。

その他:室町中期の文献に見られる特徴的なことや調査で気付いたことを記述する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 室町中期の古記録文献の記述的研究

平成22年度は、中原康富『康富記』(記録1415~55)の記述研究を行った。平成22年度は、中原康富『康富記』(記録1415~55)を調査文献として記述研究を行った。

1)「記録語」では、「邂逅」「各出」「活計」「計會」「経廻」「結構」「(不)合期」「參差」「自愛」「併~」「時儀」「斟酌」「中央」「張本」「為體」「同篇」「突鼻」「比興」「秘計」「奔波」「與奪」「厓弱」「和讒」等が見られた。

2)「異名と唐名」の「異名」では、「回禄(火災)」「歡樂(病)」「五明(扇)」「八木(米)」「八座(參議)」「要脚・用脚(錢)」「丹州(丹波・丹後)」「讚州(讃岐)」「勢州(伊勢)」等が見える。「唐名」では、「亞相(大納言)」「羽林(近衛府)」「外史(外記)」「翰林(文章博士)」「給事中(少納言)」「金吾(衛門府)」「黃門(中納言)」「戸部(民部省)」「算儒(算学博士)」「丞相(大臣)」「上林藏氷(主水正)」「夕郎(蔵人)」「度支(主計寮)」「武衛(兵衛府)」「李部(式部省)」等が見える。

3)「漢語表現・漢文表現」は「況(シヤ)~於~乎」「曾(テ)不~」「宜(シヤ)~ベシ」「不可勝計(アケテガハハツス)」等が見える。

4)「記録語法」では「有御~(御~アリ)」「以~被~(以テ~ル)」「被下(クハ)」、形式名詞に「~之間」「~之處」「~時」の他に「~之段」「~之篇」等が見える。

5)「病の語彙」に、「違例」「疫病」「虚気天シ病」「御惱」「下風腫物」「痔所勞」「邪病」「辛勞」「中風」「腫物」「腹痛」「風氣」「御不豫」「痲瘡」「虫腹」等が見える。

6)「唐代口語」は「大都」「向後」がある。

7)「漢語副詞」として、「一往」「一向」「結局」「早速」「始終」「須臾」「忽別」「大概」「大略」「不圖」「萬一」「委細」等がある。その他の特徴として、『康富記』は儀式の様子(有職故実)をしっかりと記録する傾向にある。また、「外史(外記)」「給事中(少納言)」「上林藏氷(主水正)」「度支(主計寮)」等の珍しい「唐名」の使用がある。特に「算儒(算学博士)」は『日国大』(第二版)に記載なし。

平成23年度は、中山定親『薩戒記』(記録期間1418~43年)の記述研究を行った。

1)「記録語」では「有若亡」「淵底」「雅意」「邂逅」「涯分」「経営」「計會」「結構」「見來」「相博」「左道」「自愛」「併」「時宜」「入魂」「生涯」「勝事」「如在」「如泥」「參差」「斟酌」「對揚」「逐電」「張行」「一二」「等閑」「同編」「如法」「比興」「秘計」「不合期」「奔波」「以外」「与奪」「隣單」「和讒」等が見える。

2)「異名」では「歡樂(病)」「回禄(火

事)」「五色(瓜)」「八座(参議)」「要脚(銭)」「龍蹄(駿馬)」が見える。「唐名」では「宸儀」「撰録」「撰籙」「博陸」「執政」「執政」「大相国」「太相国」「左相府」「右相府」「内相府」「亜相」「黄門」「亜将」「羽林」「武衛」「金吾」「大丞」「戸部」「大理」「都護」「拾遺」「雲客」等が見える。「異名」は多くないが「唐名」は多用されている。

3)「漢語表現・漢文表現」では「不可勝計(アゲテガフバカズ)」「豈~乎」「況~哉(乎)」「蓋是~也」「須~」「未曾有」等が見える。漢文表現は特に目に付かない。

4)「記録語法」では「副詞+以」(「共以」「甚以」「逐以」「適以」「早以」等)や「以~被~(以テ~ル)」「被下~(クダル)」「気色(気色カカフ)」「有御~(オノゴ~リ)」等が見える。なかでも「可被察下候(察しくださるべく候)」の例が、応永28(1421)年2/3の白川雅兼書状に見え、恩恵的な補助動詞の用法として注目される。

5)「病の語彙」は「獲麟」「減気」「雑熱」「所勞」「中風」「病氣」「風氣」等が見える。

6)「唐代口語」では、「大都(材木)」「自余(ジヨ)」「本自(トヨリ)」がある。

7)漢語副詞では「結句」「須臾」「惣別」「大概」「大略」「委細」等が見えた。

その他の特徴として、『薩戒記』も有職故実に詳しく、儀式の状況を克明に記述する傾向の強い文献であるといえよう。

平成24年度は、広橋兼宣『兼宣公記』(記録期間1387~1428)の調査を行った。

1)「記録語」では「邂逅」「帰畢」「計会」「喧嘩」「故障」「自愛」「併」「入魂」「斟酌」「濟々焉」「題目」「張行」「突鼻」「以外」「如然」「夜前」「与奪」等が見えた。

2)「異名」では、「雲客(殿上人)」「歡樂(病)」「五色(瓜)」「南呂(八月)」「老堂(母)」等が見えた。なお「老堂(母)」は小学館『日本国語大辞典』(第二版)に掲載がない。「唐名」では「亜相(大納言)」「羽林(近衛府)」「翰林(文章博士)」「黄門(中納言)」「職事(蔵人頭・蔵人)」「執柄(撰政・関白)」「尚書(弁官)」「丞相(大臣)」「夕郎(蔵人)」「仙洞(太上天皇)」「大理(刑部省・檢非違使別当)」「礼部(治部省)」等が見えた。

3)「漢語表現と漢文語法」は漢文表現に「曾未(カテ~ズ)」や「宜(ヨク~ベシ)」が使用される。漢語に「芳躅」がある。

4)「記録語法」では、「有御~(御~リ)」「以~被~(以テ~ル)」「被下~(クダル)」「候気色(気色カカフ)」「伺天氣(テマカカフ)」「更以」「遂以」「將以」「先以」「皆以」「尤以」等が見えた。

5)「敬語表現」として、主上・女院には「令~御坐(シメ~サス)」が使用されている。表記が「令~御」でなく「令~御坐」である点が有意義である。また、「令~給(シメ~タツ)」は主上、撰政、大臣クラスに使用されるが、場面では家君(父、権大納言)にも使用する

点が興味深い。

6)「漢語副詞」に「委細」「惣別」「大略」「如法」等が見えた。

7)「病氣語彙」に「歡樂」「窮屈」「疾病」「所勞」「損事」「病惱」がある。

その他として、記録語法であった「及秉燭(秉燭ニ及ビテ)」が「秉燭程」「秉燭之程」と記載されているのが時代の変遷を思わせた。

平成25年度は山科教言『教言卿記』(記録1405~11年)の記述研究を行った。

1)「記録語」では「活計」「計会」「左道」「自愛」「時宜」「商量」「参差」「斟酌」「相博」「損色」「中央」「籌策」「等閑」「同篇」「比興」「秘計」「無勿躰」「与奪」等が見えた。

2)「異名」では、「回禄(火災)」「款冬(落)」「歡樂(病)」「五色(瓜)」「入首陽(餓死する)」「八木(米)」等がある。「唐名」では、「亜相(大納言)」「黄門(中納言)」「戸部(民部卿)」「相公(参議)」「武衛(兵衛督)」「阿州」「相州」「丹州」「濃州」「飛州」等がある。

3)「漢語表現・漢文表現」は「或~或~」「抑(ソレト)」「宜(シ)~可(ベシ)」等があるが、漢語表現は特に見えない。

4)「記録語法」では、「以~被~(以テ~ル)」「被下(クダル)」「被成(ナル)」「有御~(御~リ)」等が見えた。

5)「病の語彙」では、「違例」「霍乱」「口熱」「シヤクリ病」「疝気」「中風」「腹痛」「癩瘡」「痢病」「療病」等があった。

6)「唐代口語」では「向後」がある。

7)「漢語副詞」に「一途」「慙慙」「結句」「嚴重」「早速」「惣別」「大概」「大略」「委細」等がある。その他では「有難々々」「畏入々々」「喜悦々々」「殊勝々々」「神妙々々」「祝著々々」「珍重々々」「不便々々」「比興々々」「無念々々」「目出々々」「面目々々」「無勿躰々々」等の評価語を多用する。

また、日記の一年目に仮名の記載が多い。自立語は大きな仮名文字で、小さな仮名文字は付属語が主である。使用されているのは「ト、テ、ニ、コ、ハ、ノ、ハ、マ、モ、ヨリ、ヲ」等の助詞である。これは小仮名文字がないと語順が乱れ誤読されそうな箇所を使用される。また、助動詞の「キ」が「青侍一人被召具キ」のように小仮名表記される。仮名表記は初めの頃が主で二年目頃からは減少していく。

## (2) 記録語「生涯」の意味の研究

論文 「室町中期以前の「生涯」の意味をめぐって」では『看聞日記』以前の古記録等に見える「生涯」やその熟語「失生涯(生涯を失う)」には、未だ「命を失う」の意味は無く、「所領を没収される、役職停止などで生活の術を失う」の意味で使用されていることを、小学館『日本国語大辞典』(第二版)や『角川古語大辞典』が取り上げる用例を検証しながら論証した。そして、「命を失う」の意味で解釈するのは、室町後期の日葡辞書(1603-04)の記述「Xogaini(〇は開音)(シ

ヤウガイニ)カケテ。すなわち、イノチニカケテ 訊 生命を犠牲にしてもあることを実行する」を鎌倉期の用例にまで当てはめたことによる誤解であることを述べた。論文「『看聞日記』に於ける「生涯」を含む熟語の意味 「及生涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等の意味について」では、続群書類従本『看聞御記』で拾い得た用例の中、「生涯」を含む熟語についてその意味を検討し、『看聞日記』においては、未だ「命を失う」の意味は無く、「所領没収、役職停止などで生活の術を失う」の意味であること、派生的な意味として「窮地に陥る」の意味があり、未だ「生涯」を含む熟語は「命を失う」や「命を奪う」の意味には至っていないことを述べた。論文「『看聞日記』に於ける「生涯」の意味をめぐって」では、『看聞日記』で「生涯」と単独表記された用例を取り上げ、それらの意味を考察し、「命をなくす」の意味に読み取れるのはなくて、多くは「上級権力者に譴責されて所領等を奪われ、生活の術をなくす」の意味か、その派生的意味の「(譴責され、所領を奪われ役職を失い)窮地に陥る」の意味で使用されるのを論述した。

「生涯」に「命を失う」の意味が出現するのは、『大乘院寺社雑事記』では、文脈からは長祿三年(1459)辺りに2例が見えるが、文脈に頼らずに確実に「生涯」に「命を失う」の意味になるのは、寛正六年(1465)の「生涯衆合十二人云々」からである(論文)。

### (3) 中世阿蘇文書における記録語研究

「中世阿蘇文書に見える記録語をめぐって」(論文)と題し、齋木一馬氏が「国語資料としての古記録の研究 近世初期記録語の例解」で取り上げた『上井覚兼日記』(島津家家老の日記〔記録 1574~86〕)に見える記録語 37語が中世の阿蘇文書で使用されているかを調査した。阿蘇文書では17語「噎(アツカイ)、案中、案利、早晚(イツ)、格護、稠(ヒツシ)、口能、現形、誘(コソフ)、如く、愀易(シヤク)、愀変(シヤン)、順逆、続(ツギ)、行(イダテ)、閉目(トジメ)〔魚+各=ハツク〕が使用されていた。その中に九州方言的な記録語があり、「案利、如く、順逆、愀易、愀変、閉目」の語について、「阿蘇文書に見える九州方言的な中世記録語をめぐって」(論文)と題して論述した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

堀畑正臣「『大乘院寺社雑事記』の「生涯」に於ける「命を失う」の意味の登場」(『国語国文学研究』(熊本大学文学部)第四十九号 2014年3月、314~330頁)査読なし。  
堀畑正臣「『看聞日記』に於ける「生涯」の意味をめぐって」(『国語語彙史の研究

三十二』和泉書院、2013年3月、225~241頁)査読有り。

堀畑正臣「中世阿蘇文書に見える記録語をめぐって」(吉村豊雄・春田直紀編『阿蘇カルデラの地域社会と宗教』、清文堂出版、2013年3月、233~270頁)査読なし。

堀畑正臣「阿蘇文書に見える九州方言的な中世記録語をめぐって」(『国語国文学研究』(熊本大学文学部)第四十八号、2013年2月、66~80頁)査読なし。

堀畑正臣「『看聞日記』に於ける「生涯」を含む熟語の意味 「及生涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等の意味について」(『国語国文学研究』(熊本大学文学部)第四十七号、2012年2月、1~16頁)査読なし。

堀畑正臣「室町中期以前の「生涯」の意味をめぐって」(『明月記研究 記録と文学』13号、明月記研究会、2012年1月、201~216頁)査読なし。

〔学会発表〕(計6件)

堀畑正臣「阿蘇文書に見える九州方言的な中世記録語をめぐって」(熊本中世史研究会、2013年1月26日、於しらかわ自然庵〔熊本市黒髪二丁目〕)

堀畑正臣「阿蘇文書に見える九州方言的な中世記録語をめぐって」(九州方言研究会、2013年1月12日、於熊本大学)

堀畑正臣「『看聞日記』に於ける「生涯」をめぐって」(第98回国語語彙史研究会、2011年9月17日、於奈良女子大学)

堀畑正臣「室町中期以前の「生涯」の意味をめぐって」(2011年7月23日、明月記研究会、於東京大学)

堀畑正臣「室町中期以前の「生涯」の意味 小学館『日本国語大辞典』(第二版)等の「生涯」の意味記述をめぐって」(2011年2月19日、第111回黒髪古典研究会、於熊本大学)

堀畑正臣「室町中期以前の「生涯」の意味 小学館『日本国語大辞典』(第二版)等の「生涯」の意味記述をめぐって」(2010年12月26日、第234回筑紫日本語研究会、於九州大学)

〔図書〕(計1件)

堀畑正臣『室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究』〔平成22(2010)年度~平成25(2013)年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究報告書、平成26(2014)年3月、かもめ印刷〕1~85頁。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀畑 正臣 (HORIHATA MASAOMI)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号: 30199559